

常照

第837号

『おかえり』

日本映画界を代表する俳優・高倉健さんが亡くなられて、来年で十年になるそうですが、数々の名シーンと不器用でひたむきな男を地でいくような健さんの演技は今でも心に残っています。

中でも名作といわれる「幸せの黄色いハンカチ」。監督の山田洋次さん、共演の武田鉄矢さん

が撮影の裏話などを紹介する番組が今年四月に放映されました。

健さんが一躍有名になったのは迫真の演技で大人気となったヤクザ映画でした。当時、多いときには年間十三本も撮るという過酷さで、ただ体を張った芝居に限界を感じていたそうです。

そんな健さんの転機になったのが、1977年公開の「幸せの黄色いハンカチ」でした。

早春の北海道を舞台に、罪を犯し刑務所から出所した中年の男が偶然知り合った若い男女と共に、昔暮らしていた夕張を指して旅をするという物語であります。

映画初出演ながら健さんと共演することとなった武田さんは、大胆にも健さんの前でタバコを吸ってスタッフにあきれられたとか…。

撮影当時に健さんが使っていた台本が見つかり、山田洋次監督も興味深げに見入っていました。

台本には、セリフの横に赤い線が引いてあるところがありませんでした。重要なところということでしょう。

よく見ると健さんのセリフではないところにも線が引いてありました。それは妻役の倍賞千恵子さんの「おかえり」というセリフでした。何度も何度も引い

てありました。

山田監督は「これはどういふことなのかねえ」と不思議そうでしたが、実は共演した武田さんはその答えをご本人から聞いていたそうです。

健さんは武田さんに「この映画のテーマは何だと思う？この映画のテーマは『ただいま』なんだ。玄関を開けて『ただいま』という。奥から『おかえり』と声が返ってくる。それが幸せなんだ！」と熱く語っておられたのだそうです。

「ただいま」というと「おかえり」と返ってくる。当たり前のようにだが、それが幸せなのだ。ささやかでも安心して帰っていただける

場所があることの幸せをこの映画は描いているのでしよう。

以前、これとよく似た話を教えていただきました。

京都の仏教学院時代にお世話になった先生が札幌に外向されたときのことでした。

その先生は学生寮で寮生のお世話をされていました。学生と共に生活する中での思い出をまじえながらの講演でした。

ある年にとても心配な学生さんがおられたそうです。いつ見ても、なんだか寂しそうで、つまらなそう。授業も上の空、同級生ともあまりなじめていないようなので、気になって「困ったこと

があつたら、いつでもおいで」と言っていたそうです。

長年の経験から先生は「彼はつよいホームシックだ。このままだと夏休みに帰省したらもう学校へは戻ってこないかもしれない」と思っていたそうです。

相変わらずの日々が続いたある日、その学生さんの様子が少し明るくなっていたそうです。

不思議に思った先生は彼に「元気になってよかった。何かいいことあったの?」と尋ねると学生さんは「先日、どうしようもなくなくなって、つい実家に電話してしまった。そうしたら母が「辛かったら、いつでも帰っておい

で」と言ってくれた。いつでも帰っておいでと言ってくれたので、僕、もう少しここで頑張ってみようと思いました」と話してくれたそうです。

「ただいま」「おかえり」。「いつでも帰っておいで」という幸せ。安心して帰れる場所があるからこそ、いまここで頑張れるのかもしれません。

阿弥陀さまのお浄土は「おかえり」とあたたかくむかえてくれる、そんなところなのでしよう。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

十月の常例布教(ご法話)のご案内

《宗祖親鸞聖人報恩講》

○期 日 十月十三日(金)速夜

十六日(月)満日中まで

○報恩講布教

滋賀教区甲賀組報恩寺

講師 九條 孝義 師

日程等につきましては詳しくは別に配布のご案内をご確認ください

○場 所 小樽別院本堂

◎なお、報恩講修行に伴い期間中は月忌参詣をお休みさせていただきます。感染症対策の上、どうぞ報恩講にお参りください。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号
本願寺小樽別院

電話 (0)三三四 二二一〇七四四番
 FAX (0)三三四 二九一四〇八〇番
 テレホン法話 二七一六 一六番